『興亡の世界史～シリーズ』　（講談社）

（注）　**『興亡の世界史』の既刊はすべて図書館にあります。カウンターで問い合わせてください。**

前回も紹介したかもしれませんが、図書館が少しずつこのシリーズを揃えてくれているので、新しい本が購入されるたびに読んでいます。少年時代にアメリカ文化に毒されたせいで、カタカナの名前や地名に違和感がないのも影響しているのでしょう。それで今まで、外国のノンフィクション小説や歴史に関する本を多数読んできました。このシリーズで、ヒッタイトとは？やフェニキア人て何者とか、ケルト人はどこから来たの？等々素朴に思っていた疑問が少しずつ解消されています。今は、シリーズ１３「近代ヨーロッパの覇権」を読んでいます。これは、最終章で第一次世界大戦を少し取り上げています。第一次世界大戦についてはあまり日本人はなじみがないようで、詳しく知る機会があまりありません。まず私は最終章から読み始めました。時々３ページほど読んで睡魔に襲われることもありますが、今までの知識や細かな部分が結びつくとスケールの大きな物語に接しているようで、爽快な気分になります。このシリーズはそれぞれの専門家がテーマに沿って明快に著述しています。高校時代は世界史という科目も得意でしたが、実生活とは無縁の道楽、時間つぶしも、大切にしていきたいと思っています。

読書案内

坂本　光司　著

『日本でいちばん大切にしたい会社』　（あさ出版）

（注）　近日中に図書館に入ります。

この本は、最近私が通勤電車の中で読んだ本で、胸が熱くなり涙をこらえるのに必死になった本です。みなさんは、「会社」とか「働く」と聞くと、どんなイメージを持ちますか？「しんどい」とか「きつい」というマイナスイメージを持っている人も多いかもしれません。私自身も、「会社」というと、「利潤第一」「業績第一」で、「リストラ」や「過労死」という言葉からも連想されるような「冷たい」マイナスイメージでした。しかし、この本を読んで私の「会社」に対する考え方は大きく変わり、「あたたかい」プラスイメージになりました。

この本の中で紹介されている５社は、社員やその家族、顧客や地域社会など、会社に関わるすべての人々の幸せを第一に考え、それを実現し、その結果として業績も好調という会社ばかりです。日本にこの５社のような会社が増えれば、いきいきと働き、幸せを感じる人がきっと増えると思います。

みなさんも何年後かには社会に出て働きます。会社を経営する人もきっといるのではないでしょうか。働くとはどういうことか、会社とはどういうものか、そして生きていくうえで大切なことは何かを感じることのできる一冊だと思います。ぜひ、一度読んでみてください。

中野　京子　著

『怖い絵』　（朝日出版社）

［７２３／Ｎ３／１］

三浦　しおん　著

『あやつられ文楽』　（ポプラ社）

（注）　近日中に図書館に入ります。

「お世話になっています」

北野高校に赴任して十年目を迎えますが、始めて北野高校の図書館を見学させて頂いた時に前評判以上の蔵書にびっくり、でもワクワクしたのを憶えています。地域の図書館は激戦区で長い予約待ちなので、北野で本を借りられるのは幸運です。

０１年から、読んだ本の作品・作者をメモしているのですが、大半は北野の蔵書かもしれません。

直近でのお勧めは「怖い絵」。テレビで、作者自身が、毎週一作づつトツトツと解説され、味のある番組でしたが。ご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。早速　北野で本を調達しました。滑らかな文章に辛口スパイスを程よく効かせた独創的な着眼点の作品です。

欧州に旅行した際に、「王女マルガリータ」を始め、各国の美術館で鑑賞した絵画が、本の中で多く取り上げられていて　親近感も湧き　面白さも倍増されました。

今「文楽」の人形の魅力に、はまっていますが、ほかにも旅行や芸術鑑賞・講演会など　行きたい、見たいことが山ほど。読書やアドバイスで予習し、情報を得て、２倍３倍楽しもうと思っています。

是非　「この本面白いよ」「〇〇行って見たら」って、声を掛けてください。待ってます。

ダニエル・スタシャワー著

『コナン・ドイル伝』（東洋書林）

［９３０／Ｓ１７／１］

探偵シャーロック・ホームズとワトソン医師のコンビが活躍する四冊の長編と六冊の短編集（全部で六十編の物語）は、『聖

書』に次いでこれまで世界で最もよく読まれてきた本だと言われる。ドイルは他に歴史小説やSF小説・冒険小説など数多くの物語を書き遺したが、今日『ホームズ』物以外の作品を読む人は少ない。

しかし、ドイルは自分の本領は歴史小説などにあり、ホームズの物語は「どちらかと言えば程度の低いもの」とみなしていた。ホームズ物ばかりが評判になることに嫌気がさし、ホームズを憎み、『最後の事件』でホームズを葬り去ったのはよく知られた事実だ。しかし、ドイルは諸事情から数年後『空き家の怪事件』でホームズを復活させざるを得なかったのである。

青年時代のドイルは貧しく、地方での内科の開業医を経て、ロンドンで眼科医に転じようとしたがうまくいかなかった。冒険家としては北氷洋を数ヶ月にわたって航海した。アマチュアのスポーツマンとしても活躍した。父・母をめぐっては複雑な家庭問題があった。社会問題にも関心が高く、選挙にも出た。晩年は心霊術に凝って世間での評判を落とした。

この、六百ページ近くもあるドイルの伝記によって、我々は彼の生涯について多面的な知識を得ることができる。著者はホームズの大ファンであるとともにホームズ物語を模倣した贋作（パスティーシュ）もものしているアメリカ人ジャーナリスト。

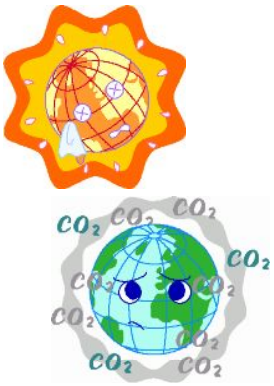
松井 孝典 著
『宇宙人としての生き方』
（岩波新書）
［４４０／Ｍ１３／１］

魅力的でショッキングな書題であるが、宇宙科学者から見た現代文明論である。

宇宙人としての視点を持つ
地球をシステムとして見る
人間圏をつくって生きる
地球学的人間論へ
生命の起源と進化
地球外知的生命体の可能性
宇宙・地球・生命・人類のスケールで考える
人間圏の現状と未来

の８章よりなる。産業革命以降の人間活動が生活の利便をもたらしたが、同時に公害や環境破壊など文明の問題をもたらし、最終戦争の恐怖に怯えている。地球外知的生命体との交信は困難だが、人類がおごり高ぶらず、相対的な視点で問題を考えることの必要性が求められる。文明が発展すると、宇宙・地球・生命の歴史が解読できるようになる一方で、文明の成立基盤が揺らいでくるのだ。

人類の文明は、行き詰まりが来ると、技術革新やフロンティアの開発で切り抜けてきた。農業、革命、大航海時代、新大陸発見、産業革命がそうであった。しかし現代文明は、地球の有限性に直面している。地球上にもはやフロンティアは存在しない。極地までもが環境汚染にさらされている。楽観派は月や火星、さらには太陽系全体にまでユートピアを求めればよいと言うが、私はこれにくみしない。地球人口を80億人程度に抑えるとして、人々が平和でまずまずの水準の生活をおくれるような、地球社会を構築する必要がある。



G・R・パッカード 著
『ライシャワーの昭和史』
（講談社）
［２８９／Ｐ１５／１］

最近のニュースを見ていると、社会科の教員のひとりとして、戦後の日米関係を考えずにはいられない。

ライシャワーはまず歴史家である。ハーバード大学で教鞭をとった彼は、アメリカ人の日本観・東アジア観に支配的な影響を及ぼし、その弟子は世界各地の大学でアジア研究の先頭に立った。朝鮮戦争を目にしたライシャワーの関心は、アメリカの対外政策に向き始めた。彼は早くから、アメリカは中華人民共和国を承認して貿易を行うべきであり、ベトナム植民地復活を狙うフランスに加担すべきではない、と主張していた。彼の主張の正しさが証明されるのは、泥沼のベトナム戦争が終結する１９７０年代になる。その間、多くのアメリカ兵の命が失われた。

彼の政治家としてのいちばんの業績は、ケネディー大統領から駐日大使に任じられたときに始まる。沖縄返還への基礎は、彼の手によるものと評価して良いだろう。しかし、彼のキャリアにも陰りが見え始める。ケネディー大統領の暗殺が象徴的である。66年に大使を退いた彼はハーバードに戻り、日本はアメリカの信頼できる同盟国である、との主張を展開し続けた。一方、ソ連は崩壊に向かって冷戦意識が薄れ、日本は自動車・半導体などの分野でアメリカ経済の覇権を脅かすようになった。「アメリカの新しい敵は日本だ」　ライシャワーの主張が嘲笑されたことは言うまでもない。

１９９０年。日本のバブルが崩壊し、同じ年湾岸戦争が勃発。アメリカの敵が日本ではないことが証明された。しかし、この年にライシャワー自身も亡くなった。駐日大使だった64年に、日本の若者に襲われて出血し、大量の輸血を受け、Ｃ型肝炎に感染していたのだ。

単なる伝記ではない。生きた政治が感じられる一冊である。

読書案内

図書館の 新刊書 紹介

昨年末以降図書館に入った本のうち、歴史上の人物を主人公にした小説を紹介しよう。

①五木寛之『親鸞』上下（講談社）［913／I30／7／1～2］

物語は、八歳の親鸞が闘牛を見物する場面から始まる。危うく牛の角に刺されそうになった時に、死体が散乱する鴨川の河原に住む坊主に助けられたのだ。平清盛が栄華をきわめる平安時代末期、両親のいない親鸞は伯父の日野範綱に引き取られて京都で暮らしていた。「異形の牛飼童や、乞食同然の聖たちや、辻の遊芸人たちや、無頼の徒たちの世界」「この世も地獄、あの世も地獄の世界と覚悟した者たちの世界」にも惹かれたが、九歳で出家し、十二歳で比叡山に入山した。厳しい修学と質素な生活に耐えていたが、「自分には仏性がないのではないかと」との疑問に捉われ，悩んでいた。比叡山でも屈指の読経・歌唱の名手に成長した親鸞は、後白河法皇が主催する法勝寺の法会・歌競べに参加することになった。「ひとたびみなをとなうれば らいごういんじょううたがわず」と親鸞が歌うと、万余の群集が唱和し、歌声は暁の空を揺るがす大合唱になった。下巻では、この法勝寺の八角九重塔が炎上する場面も出てくる。その後、親鸞は山を下り、法然上人と行動を共にすることになった。話は親鸞が越後に流されるところで終わる。基本的には事実を踏まえながらも、伝聞などに基づく荒唐無稽で緊迫した話が多く、面白く読むことができた。法然・親鸞といえば悪人正機説が有名であるが、悪とは何か、悪人とは誰かを考えさせてくれる本である。

②沖方丁『天地明察』（角川書店）［913／U13／1］

江戸時代前期の棋士（将軍の御前で御城碁を打つ）にして天文・暦・和算の学者でもあった安井算哲（渋川春海）の生涯を描いた作品である。囲碁の名門安井家を継いだ算哲は、毎年、生家のある京都から江戸に出て、会津藩邸で過ごす。時々江戸城に登城して碁を打ったり、大名邸や寺社に出向いて碁の指導をしたりして暮らしていた。その算哲の趣味が算術（和算）だった。神社に掲げられる算額絵馬の問題を解く。正解だったら「明察」となる。ある時、江戸金王八幡宮に、「今、釣（高さ）が九寸、股（底辺）が十二寸の勾股弦（直角三角形）がある。その内部に、図のごとく、直径が等しい円を二つ入れる。円の直径を問う。礒村吉徳門下村瀬義益　寛文元年十月吉日」という算額を見つけた。算哲が出題者の村瀬義益の算術塾を訪ねることで、話は展開していく。どんな難問でも解く「解答さん」とよばれた関孝和を知ることにもなった。算哲が算術に強い関心を持っていることが幕府の首脳にも知られ、老中の酒井忠清から、高度な算術が要求される「測地や暦術も得意か」と尋ねられる。これが、算哲が幕府の改暦事業に参加する第一歩となった。日本では、平安時代以来八百年以上もの間、中国の宣明暦が使われてきたのだが、誤差が拡大し、改暦が喫緊の課題となっていた。以後、算哲を中心に改暦のための作業が進められ、蹉跌と挫折にめげず、二十年後に貞享暦は完成、採用されることになる。日本人の手によって初めてつくられた暦である。元気・勇気を与えてくれる話である。二〇一〇年本屋大賞に選ばれた。

③辻原登『許されざる者』上下（毎日新聞社）［913／T80／3／1～2］

主人公のドクトル槇は和歌山県森宮（新宮）の医師である。米国のオレゴン州立大学で医学を学んだ後、インドのボンベイ大学で脚気の研究に取り組んで帰国するところから物語は始まる。貧しい人々からは治療費・薬代を取らないことから、森宮の人々に慕われていた。槇は、明治末期の大逆事件で南紀グループのリーダとされ、死刑に処せられた大石誠之助をモデルとしている。今まで名前しか知らなかった大石誠之助に関心を持ち、図書館にある森長英三郎『磔亭大石誠之助』（岩波書店）も読んでみた。槇と大石の人柄は重なって見えるが、異なるところも多い。日露講和反対運動が各地でおこる騒然とした雰囲気の中で、森宮で革命をめざす暴動がおこり、槇も首謀者として逮捕される。釈放された後、オレゴン州立大学に招聘されて渡米することになった。話はそこで終わる。したがってこの小説では大逆事件は出てこない。しかし、森宮を訪れた幸徳秋水は実名で登場する。また、管野スガと思われる新聞記者の金子スガも出てくる。事実とフィクションの境目がわからなくなってくる。日露戦争の記述が大変詳しいが、同様である。大石は日露戦争に従軍していないが、槇は戦場の満州で森林太郎（鴎外）と交流している。槇以外で最も興味を引く人物は、槇の姪の西千春と甥の若林勉であるが、この二人は大石の甥で、後に東京に文化学院を開いた西村伊作をモデルにしている。西村は、大石が東京の監獄に移された際に、当時は珍しいオートバイに乗って東京まで追いかけたという。小説の主人公にできる人物だ。

④辻井喬『茜色の空』（文藝春秋）［913／T87／6］

戦後の首相大平正芳が主人公。